

吉田兼俱と吉田神道・齋場所

岡田莊司

Yoshida Kanetomo and Yoshida Shinto / Saijo-sho
OKADA Shoji

はじめに

- ① 吉田神道成立以前
 - ② 『日本紀正義』と『宗源神道誓紙』の史料性について
 - ③ 齋場所の創設と吉田社
- おわりに―偽作と秘事の真意

【論文要旨】

中世後期、吉田兼俱により吉田神道が形成された。神道説の創作がはじまる時期と信仰施設である齋場所が創設されたのは、ほぼ同時期の文明元年・二年のことであった。神道説と齋場所とは一体の関係の中で構築された。兼俱は応仁以前までは、神祇官の卜部氏の立場で、宮内内の神祇祭祀に熱心であったが、応仁の動乱により、公事・神事は退転を余儀なくされ、また、兼俱の自邸と吉田社の焼失、さらに殺害事件に遭遇し、新たな神道への理解に歩み出すことになる。

兼俱は文明の前半期、着々と神道説の偽作と秘事化を重ねていく。これまでの久保田収・西田長男の研究により、吉田神道の成立は文明年間の初期であることが確実になってきたが、その中で用いられた史料の信憑性については、これまで十分論議されてこなかった。とくに『日本紀正義』に収められた「宗源神道誓紙」は吉田神道成立を確定できる重要な史料となるので、ここに収録された伝授書とともにその信憑

性について検討した。文明の初め「壮年」となった兼俱は応仁の困難を乗り越え、「誓紙」を書くことで新たな神道説を構築していく。「誓紙」は兼俱自身に向けた意志の確認であった。

神道説の形成とともに、齋場所も文明年間の早い時期に創建されたが、ここに当初から祀られたのは、全国の官社、古代に制定された延喜式内社三千余の神々であった。兼俱は偽作までして、これを公的文書によって確認を得た。公家社会をも欺く兼俱の大胆な行動がみられる。齋場所の創設は古代以来の伝統祭祀の終焉を意味していた。同時に朝廷祭祀の殆どはここに中絶を迎えることになる。度々の公家社会をも欺く秘事の創成を経て、文明後半期以降、兼俱の吉田神道は、地域神社との繋がりを深め、神社界の棟梁として「神道長上」家の地位を確定していった。

【キーワード】 吉田兼俱、吉田神道、齋場所、「日本紀正義」、偽作